シイン Scene 景色。

廣瀨武夫 海軍中佐。日露戰爭の際旅順口閉塞に赴くこと二回、終に敵彈に斃れた。時は明治卅七年三月廿六日。年三十七。

一二 嫂に贈る

廣瀨武夫

毎度の御懇書拜受、再三精讀罷在候。先以て姉上様にも馨ちやんにも不相變の御壯康、大賀の外無之候。從つて武夫儀は、例の頑健、日夜軍務に從事罷在候間、乍憚御休神可

被下候。毎回々々の御手紙は實に武夫に對する御友愛の情溢るゝ許りにて、武夫は衷心感激の至に堪へず、乍毎度唯々感謝々々罷在候。御惠贈の書籍・吳羊羹・耳袋、並に靴足袋、確に拜受仕候。御厚情に酬ゆる辭を見出し不申候。難有奉謝候。先日大島艦入港し、卽夜家兄來訪被下、戰後始めて兄弟の面會、不覺嬉し涙に暮れ申候。兄上樣は昨今御身體壯健に被爲渡、吳にて見し如き病後の樣子更に無之、在艦の同僚等も皆左樣見受け候程なれば、御安心可然と存候。武夫に於ても、其の點に於ては、大に安堵罷在候。報國丸にての働に付、兄上樣には非常に被悅、武勇絕倫、先考並に山縣元帥に代り、これを激賞すとの御手紙をも戴き、武夫の滿足も不過之候。翌朝大島は錨を拔きて出港致候處、昨夜御手紙參り候。不相變御壯健の趣、御休神可被下候。安井樣よりも御手紙を戴き申候故、昨日御返事を差上げ申置候。其の他知己諸君よりの祝詞多く、新聞紙上にも、ある事なき事書立て、鬼などの仇名をも付し申候など、可笑しくもあり、迷惑致候事も有之候。而して報國丸にて働きし眞相など、武夫より親しく聽きしなどと書立て候も誤多く、迷惑に感じ候點も有之候。負傷者に御見舞として餅をとの御意見はさることながら、彼等には燒くなどの自由無之候間、御取止め被下度、若し思召有之候はば、武夫の姉として、見舞狀を在佐世保病院第一室藤本金太郎・武野敬次宛

廣瀬武夫と其の筆蹟

に御出し被下候はば、幸甚の至に不堪候。右兩人には、病院船に送る砌、武野に十圓、藤本に五圓丈、小遣として贈り置候。又閉塞隊の士官一統より、梅原機關兵弔慰金と且前記兩負傷者へ見舞金として十圓宛を出し置候。

武夫儀は愈〻軍功相勵み申すべく、七生=人間=滅=國賊=とは、一貫の精神に有之候間、決し

て先度位の働にて滿足致す者に無之候。元來天佑を確信し居ることに候へば、決して〳〵無用の御配慮被下間敷候也。再拜。

三月二十日　　弟　武夫

姉上様

運送船の便よくして不自由を感じ不申候間、種々の御心遣は御無用に被遊度候。時下御自愛を祈り候。

大島正德
東京帝國大學助教授。